

## 「旧約の信仰者たちの手本」 エリシャ (11:32~34)

これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオンとバラク、サムソンとエフタ、また、ダビデとサムエルと預言者たちについても話すならば、時がたりないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と 11 章の内容

(1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

(2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

2. 11 章 32~34 節は、試練の中で信仰による勇気を発揮した先輩たちを挙げている。時期としては、士師の時代からイスラエル王国の時代である。

(1) 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた王国時代の預言者たちを指している。

(2) 34 節「剣の刃をのがれた」に該当する王国時代の預言者たちとは、エリヤとエリシャである。前回はエリヤを見た。今回は、エリシャである。

## 3. 預言者エリヤとエリシャ

(1) 時代背景：北王国イスラエルにおいて、「ヤロブアムの道」とバアル崇拝をはじめとする外国の偶像崇拝の嵐が吹き荒れた異常な時代。二人は、主によって立てられた特別な預言者である。

(2) エリヤとエリシャは、ともに死人をよみがえらせた（Ⅰ列 17:17~24、Ⅱ列 4:8~37）。エリヤとエリシャは「大預言者」（ルカ 7:16）と呼ばれる。

(3) エリヤは、死を見ることなく天に挙げられた。そしてメシアが来る前に戻ってきてすべてのことを立て直すと預言されている（マラキ 4:5~6、マコ 9:12）

(4) エリシャが行った奇跡は、数多いだけでなく、その内容はイエスが行った奇跡に似ている。エリヤエリシャ、バプテスマのヨハネとイエス、この二組のペアには共通点が多い。

## 4. 信仰による勇気、エリヤの場合は

(1) 干ばつをもたらす預言をし、主のことばに従って身を隠し、主のことばに従って王の前に姿を現し、カルメル山でバアルの預言者 450 人と対決した。

(2) しかし、エリヤの信仰による勇気にも限界があった。バアルの預言者との対決に勝利し、これで同胞イスラエル民族も目を覚ますと期待したが、そうではなかった。

王妃イゼベルの脅しに恐れをなして、国外に逃亡し、荒野で絶望の中、死を願うところまで来た。

- (3) そのとき、主の使いが現れてエリヤを力づけ、神の山ホレブへと導かれ、レムナントの教えが与えられた。その後の、エリヤは別人になったかのように落ち着き、力強い預言者となった。
- (4) そして、エリシャを後継者とし、エリヤは天に上げられた。

#### ■エリヤの携挙と後継者エリシャ

1. エリヤは、神の山ホレブで「レムナントの教え」を受けて後、帰国し、エリシャを従者とした（Ⅰ列 19:19~21）
2. 北イスラエルの王アハブは戦場で思いもよらない傷を受けてその治世 22 年を閉じた。
3. 次の王アハズヤは屋上の欄干から落ちた負傷が原因で病死、わずか 2 年の治世を閉じた。彼には男の子がなかったので、アハブの子ヨラムが代わって王となった（Ⅱ列 1 章）。
4. エリヤの携挙（Ⅱ列 2:1~18）
  - (1) ギルガル→ベテル→エリコ→ヨルダン川
    - ① 外套で水を打つと水は両側に分かれる（Ⅱ列 2:8）→川の東側へ
    - (2) 「あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように」（Ⅱ列 2:9）
    - (3) 「むずかしい注文をする。・・・あなたが私を見ることができれば」（Ⅱ列 2:10）
      - ① 1 台の火の戦車と火の馬、エリヤはたつまきに乗って天に上って行った（11 節）
      - ② エリシャはこれを見て（12 節）
    - (4) エリシャは自分の着物をつかみ、それを二つに引き裂いた。それから、彼はエリヤの身から落ちた外套を拾い上げた（Ⅱ列 2:12~13）
      - ① 外套で水を打つと水は両側に分かれる（Ⅱ列 2:14）
      - ② 外套は、エリヤの上に臨んでいた主の手（Ⅰ列 18:46）＝聖霊を表す。
      - ③ エリヤの霊とは、エリヤ個人の霊ではなく、聖霊である（ルカ 1:17）
  - (5) ヨルダン川を西側へ渡る→エリコ
5. 水を両側に分ける奇跡は、イスラエル史上 3 回目（出 14:21、ヨシュア 3:9~17）



■預言者エリシャの活動（ヨラム王、エフー王朝に代わり、3代目ヨアシユ王のとき病死）

1. エリコの水を良くする（Ⅱ列2:19~22）
2. エリコ→ベテル→カルメル山→サマリヤ（Ⅱ列2:23~25）
  - (1) エリコはヨルダン川に近い低地の町、ベテルは山地の町。エリシャはベテルの方に向かう幹線道路を上って行く。ベテルの町から大勢の若者たちがその道を下ってくる。
    - ① 23節「小さい・子どもたち」と訳されているが、43人以上もの子どもたちが集団で一人の大人を馬鹿にしてからかうというのは考えにくい。
      - クッタン：量的・数的に少ないことを表し、年齢では若いという意味
      - ナーアル：幼児から18歳までの若者を指す
      - ASVでは、**young lads** と訳している。英語の **lad** とは、元気のいい男、スポーツなどに明け暮れる若者、悪い意味では遊び人を意味する。
    - ② 24節「42人の子ども」イェーレド：少年、子ども、息子、若い男
  - (2) 彼らは、エリシャをからかって「上って行け、はげ頭。上って行け、はげ頭」と言ったので、エリシャは振り向いて、彼らをにらみ、主の名によって彼らをのろった。
    - ① 23節「上って来い」と訳されているが、原語には「自分の方に向かって来させる」という意味はない。アウラウ：上る、英語では **go up**
    - ② エリシャと若者たちとの位置関係は、「振り向いた」とあるので、坂道でエリシャは上、若者たちは下である。
    - ③ 若者たちはベテルの町の方から下ってきて、上ってくるエリシャと出会い、エリシャを取り囲んで、彼をからかい、通り過ぎていった。そのあと、エリシャは振り向いて、坂道の下の方にいる若者たちを、主の名によってのろった。
  - (3) Ⅱ列2:11「エリヤは、・・・天に上って行ったアウラウ。」→清水推論 ベテルは「ヤロブアムの道」の町である。若者たちは、エリヤが天に上ったといううわさを聞いて、嘲笑っていた。そこへエリヤの従者だったエリシャが来た。そこで、「(おまえも天に)上って行け。はげ頭」と、彼をからかった。
3. モアブとの戦いを勝利に導く（Ⅱ列3章）
  - (1) ユダの王ヨシャパテのためにする（14節）・・・メシアはダビデの家系から
4. 預言者の友人が死んだ。遺族の妻子のため借金返済を助ける（Ⅱ列4:1~7）
5. シュネムの裕福な女がエリシャに良くしたことで祝福を受け、子を授かる。しかし、生まれた子が大きくなったときに、急に病死する。エリシャがその子をよみがえらせる（Ⅱ列4:8~37）
6. ギルガルでかまの煮物の中の毒を消す（Ⅱ列4:38~41）
7. 大麦のパン20個と新穀一袋で100人の人に給食（Ⅱ列4:42~44）
8. アラムの王の将軍ナアマンの癒し（Ⅱ列5章）
  - (1) 異邦人のナアマンが主を神として認める（Ⅱ列5:1~15）
  - (2) ゲハジは、預言者の心得に違反してしまった（Ⅱ列5:16~27）。
  - (3) 新約聖書福音書の時代、イエスの公生涯との関係
    - ① イエスによるツァラアト患者の癒しがなされるまでの間で、ツァラアトが癒されたのは、歴史上これだけ。イスラエル人で癒された者はなく、従って、モ

ーセの律法におけるツアラアトのきよめ判定の規定が実際に適用されたことは一度もなかった。

② 紀元1世紀のユダヤ教ラビたちは、「メシアが現れると、ツアラアト患者の癒しの奇跡が行われる。そして、モーセの律法におけるツアラアトのきよめ判定の規定は、初めて実際に適用されることになる」と、教えていた。

③ イエスがその奇跡を行った。ユダヤ人指導者たちは隠蔽（ルカ 17:11~19）

9. 水の中に落ちた斧の頭を浮かばせる（Ⅱ列6:1~7）
10. アラムの王がイスラエルと戦っているとき、アラム軍の動向を予見してイスラエル王を何度も助ける。このため、アラムの王が大軍を送ってエリシャがいた町ドタンを包囲する。恐れる召使に対してエリシャは、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らよりも多いのだから」と言い、天使の軍団を見えるようにした（Ⅱ列6:17）。そして、エリシャの祈りによりアラム軍は盲目にされ、捕虜となる（Ⅱ列6:8~23）。
11. 飢饉のときに、アラムの王ベン・ハダテが全軍を召集してサマリヤを包囲したので、食糧不足がより深刻となって物価が高騰する。しかし、エリシャは「物資が豊かになる」と預言する。その後、主がアラム軍に恐怖心を起こさせ、アラム軍は武器や衣服、食糧物資をそのまま捨てて逃げた。アラム軍が残した豊富な食糧がサマリヤに流入して物価は下がった。（Ⅱ列6:24~7:20）
12. シュネムのあの女にこの地に7年間の飢饉が起きると預言し、外国で滞在させる。女は、7年後に戻って来て、この間に人手に渡っていた自分の家と畑を取り戻そうとして、ヨラム王に訴える。ちょうどゲハジからエリシャの奇跡を聴いていた王は、彼女に財産を返すよう命令を下す（Ⅱ列8:1~6）
13. エリシャがダマスコに行ったとき、アラムの王ベン・ハダテは病気であった。エリシャが来たことを知ったアラムの王は、部下のハザエルに贈り物を持たせて、エリシャを迎えるよう指示した。エリシャはハザエルに、あなたがアラムの王になると示す。ハザエルは謀反を実行し、アラムの王となる（Ⅱ列8:7~15）
14. ヨラム王の治世12年目、ヨラム王は、南王国ユダのアハズヤ王と組んで、アラムの王ハザエルと戦った。戦場はラモテ・ギルアデ、しかしヨラム王は負傷したため、陣営を部下に任せて自分は帰国、イズレエルにて静養していた。このとき、エリシャは預言者のともがらのひとり（エリシャに仕える若い者）を陣営に派遣し、将校のひとりであるエフーに油を注いだ。他の将校たちもエフーを支持し、エフーによる謀反となった。これにより、ヨラム王、イゼベル、アハブの子たち（サマリヤにいた70人）が死んだ（Ⅱ列8:25~9:37）
15. エフーは在位28年。イスラエルからバアルを根絶やしにした。しかし、ヤロブアムの罪、すなわちベテルとダンにあった金の子牛に仕えることをやめようとしなかった（Ⅱ列10:28~36）。
16. エフーの子エホアハズは在位17年。ヤロブアムの罪を犯し続けて、それをやめなかった（Ⅱ列13:1~9）。ここまでに、エリシャは、ヨラム王の12年、エフー王の28年、エホアハズ王の17年、単純合計57年。交替年のカウントが重なっているとすると約55年を預言者として活動したことになる。
17. エホアハズの子ヨアシユは在位16年。彼もまた、ヤロブアムの罪から離れず、なおそ



れを行い続けた(Ⅱ列 13:10~13)。ヨアシユの治世のときに、エリシャは死の病をわずらい、ヨアシユ王の見舞いを受ける。エリシャの最後の預言「ヨアシユ王はアラムを三度打つ」とエリシャの死(Ⅱ列 13:10~19)

18. エリシャの墓に投げ入れられた死人が、エリシャの骨に触れて生き返る(Ⅱ列 13:20~21)。
19. エリシャの最後の預言の成就(Ⅱ列 13:22~25)

#### ■預言者エリシャに見る信仰の勇氣とは

1. 主からの召命に全身全霊をかけて応じた(Ⅰ列 19:20~21)
2. エリヤが携挙されることを知り、その現場に何としても立ち合い、エリヤの霊の2倍を受けることを願い求めた(Ⅱ列 2:1~9)。
  - (1) これは、自分の名誉や富のためではない。
    - ① 人からの称賛や名誉を求めない(Ⅱ列 5:10~11)
    - ② 富を求めない(Ⅱ列 5:16)
  - (2) 聖霊の力によらなければ、背教の時代において預言者としての働きはできないからである。
3. 神の栄光を見たことは、彼の願いが神に受け入れられたことのしるしであった。それ以降、エリシャには聖霊が上から臨んでいた。
4. エリシャは常に、主から遣わされている天使たちが自分を守っていてくれることを見ていた(Ⅱ列 6:15~17)。これも聖霊による。

聖霊が上から臨んでくださったことが、エリシャの勇氣の源であった。人間的な勇氣ではない。

#### ■新約時代の聖霊

1. 新約の聖徒は、聖霊なる神と深い関係をもつ。
  - (1) 聖霊は、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせる(ヨハネ 16:8)。
    - ① 「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです」(ヨハネ 16:9)。メシアは、私たちの罪をすべて十字架で背負ってくださった。残る罪はひとつ、そのメシアを信じない不信仰の罪である。
    - ② 「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたが、もはや、わたしを見なくなるからです」(ヨハネ 16:10)。イエスが罪のない完全な義人であったことは、イエスが復活し、天に上げられ、父なる神の右の座に着いたことによって、証明された。
    - ③ 「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです」(ヨハネ 16:11)。神はすでにこの世を支配する者、すなわちサタンを裁いた。やがて、時が来ると、サタンと彼に従う天使たち(墮天使、悪霊)は永遠の滅びである火の池に投げ込まれる。支配者が裁かれたのであるから、その支配者に従う世の人々が同じ裁きをうけて、永遠の滅びである火の池に行かねばならないのは当然である。

- (2) 聖霊の働きを受けて真理に目が開かれた人が、信仰をもってメシアを信じるなら、信じたときに、その人は聖霊の中にバプテスマされる (使徒 1:5)。「バプテスマされる」とは、完全に浸される・染色されることをいう。
- ① 人は水の中に浸されるなら、わずかな時間で死ぬ。聖霊の中にバプテスマされることは、表現を変えて言うと、「キリスト・イエスにつくバプテスマであり、その死にあずかるバプテスマである」(ロマ 6:3)。
  - ② 信者は、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのである。このとき、私たちの内には、新しい性質が与えられる。聖書は、この新しい性質を「霊」(ヨハネ 3:6)、「養子の霊」(ロマ 8:15)、あるいは「新しいいのち」と呼ぶ。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです (直訳:いのちの新しさにあつて歩むためです)」(ロマ 6:4)。これは、霊的な復活である。霊的な復活をして新しい性質によって新しい歩みをするようになる。新しく生まれてこそ、新しい歩みができるのである。
  - ③ キリストとともに葬られたなら、必ず、キリストの復活にもつなぎ合わされて、私たちも復活する。キリストと同じ不死の体、栄光の体を受ける。これは、からだの復活である。「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです」(ロマ 6:5)
- (3) 人は水の中に浸されるなら、水を飲んでしまう。聖霊の中にバプテスマされると、すべての信者は、一つの御霊を飲む者とされる。それは、私たち信者が、ユダヤ人であっても、異邦人であっても、一つのからだ(キリストを頭とする信者の結合体、普遍的な目に見えない教会)となるためである (I コリ 12:13)。このキリストのからだである教会を成長させ、建て上げるために、信者全員に「御霊の現れ」と呼ばれる聖霊の賜物が与えられる (I コリ 12:4~11)。それをを用いて互いに仕えることが、信者の責務であり、喜びである。
- (4) 聖霊は信者一人ひとりの中に住んでくださり、助けてくださる (ヨハネ 14:16、ロマ 8:26~27)
- (5) 聖霊は私たちがメシアの王国、そして新天新地の永遠の国を受け継ぐこと、メシアとともに共同相続人となることの保証である (エペソ 1:14、ガラ 4:6~7、ロマ 8:16~17)